

宗学院公開講座（二〇一七年度）

イスラームの宗教性と現代

関西大学文学部教授 小田 淑子

ご紹介にあずかりました、小田と申します。レジュメを用意しましたが、1時間半の予定で、少し質問の時間を取りますので、レジュメをはしりながら説明していきます。

今、正面に映している画像はトルコのモスクの内部です。モスクは非常に簡素な空間で、その雰囲気味わいながら話をしていきます。イスラームの話をこでするように依頼を受けた理由は、今、徳永先生のお話しにあったように、イスラームが決している意味ではなく、とかく話題になっているからでしょう。シリアの内戦状態と、Islamic State（以下、IS）の強引な支配から逃れようとする人々が難民になる。サウジアラビアなど豊かな国も中東にあるが、難民はヨーロッパに行きたがる。それは、いろいろな意味でヨーロッパの方が生活しやすいとか、いろいろな条件があるからです。

これが、移民が増えることで、ご存知のように去年から今年にかけてフランスのルペンだとか、極右の政党、右翼の移民反対、ムスリム反対という運動が盛り上がりかけて。私にとっては幸い、極右は勝たなかったので一応収まりましたけれども、そういうことで問題になっている。それに加えて、トランプ大統領（Donald John

(Trump) が、このところは北朝鮮の問題が大きいのでちょっと静まっていますが、イスラームに対してかなり反発的なことを言っていることで、イスラームが話題になっています。

次に、日本人とイスラームについて少し話しておきます。日本では幸いに、今までのところは深刻なテロはない。それと、これは私はいけないと思っっているけれども、日本はこれだけの先進国であるにもかかわらず難民を受け入れていません。そのために、ある意味で欧米で起こっているほどのイスラーム嫌いは起こっていないということです。

でも、これは日本人が優しくて問題がないからではなくて、そういうテロがなくて難民がいらないから、この程度で済んでいるわけです。もし、これでテロがあったりしたら、日本も同じように極右的なイスラーム排除が起こらない保障はありません。そのことについてもお話しをします。

日本人のイスラーム嫌いは欧米とは違う理由です。日本人は一神教嫌いで、戒律嫌いです。日本の宗教には戒律がほとんどないために、1日5回の礼拝や断食という、とても強い拒絶反応が出てしまいます。この戒律嫌いも、日本人がイスラームを遠ざける理由だと私は考えています。さらに、日本人は欧米の価値観を自分の価値観のように思っってしまうところがあり、欧米がイスラーム嫌いだから、うちもイスラーム嫌いと欧米に主張を合わせてしまっています。ヨーロッパは過去にイスラーム世界と争いを繰り返したために、イスラームを敵視しがちですが、日本は東アジアや東南アジアには悪いことをしたけど、中東には悪い事をしていないのだから、ヨーロッパとは異なる立場や価値観が可能なのに、浅はかにも欧米に同調していることは残念だと思っっています。

下手なことを言うと批判されるだろうと覚悟しつつ、《真宗とイスラーム》について少しだけ類似点をお話ししておきます。イスラームという単語はアラビア語で「帰依」を意味し、南無阿弥陀仏の「南無」とまったく同じで

す。真宗は阿弥陀仏に帰依し、イスラームはアッラーに帰依するわけです。真宗では名号を聞くと言いますが、イスラームも神の言葉を聞くことが大事なのです。神の姿ではなくて、啓示の言葉を聞くことを大事にする宗教です。もう一つの共通点は、いわゆる在家の信者、仕事を持っている人たちの生き方を問題としているという点です。にもかかわらず、なぜこれだけの違いが出てくるのだろうか。信者は「いずれの行もおよび難」いだから信のみという真宗と、日本人から見たら驚くほど厳しい戒律を持つイスラーム。なぜ、違いが出てくるのかについて、その理由はあとで説明します。

私は宗教学という立場から見ているので、どちらが優れている、良い悪いというつもりはまったくありません。ただ、その違いがなぜ生じてくるのか。そしてその違いというものに意味があるのであれば、お互いが学ぶことも可能だと私は思っておりますので、参考にしていただけたらと思っております。

ここから、(一) イスラームの基本教義というところに入りたいと思います。

まずは『クルアーン』です。今でも、『コーラン』の方が通りがいいかもしれません。『クルアーン』はアラビア語に忠実な発音で、『聖典』の名前です。「ムハンマド」、これも昔は「マホメット」と称していました。昔の名称はヨーロッパ人たちがアラビア語をなまけて覚え、それが一般に通用していた。それが最近になって、アラビア語の発音に忠実に表記することになり、「イスラム」も「イスラーム」と表記するようになっていきます。

ムハンマドは40歳になるまで普通の商人でした。ラクダで遠距離貿易をする隊商でした。40歳で初めて啓示体験、神の声を聞きます。ただし、日本と違って神がかりにならないし、生き神にもなりません。預言者であるが、人間にすぎない、そういう立場です。

大事なのは、『クルアーン』の内容は、神自らが明瞭なアラビア語で語った言葉のみを収録している。これが、

ムスリムたちの信仰です。神が歴史のなかに現れた姿、神の自己顕現がイスラームでは『クルアーン』の言葉そのものです。キリスト教の場合、イエス自身が父なる神の子ともして神の自己顕現の姿だということになります。イスラームの場合は言葉です。と言っても、当時の人々はムハンマドを通じて聞いたけれど、それは神の言葉であり、ムハンマドの言葉とは厳密に区別されています。

ところで、イスラームは7世紀のアラビア半島で始まりましたが、その状況を少し説明します。今のサウジアラビアの辺りです。一番最後のページに地図があります。これは『岩波イスラーム辞典』から取らせてもらっています。サウジアラビアの真ん中辺に星印が2つ付いていて、上がマディーナ、メディーナです。その下にマッカ、いわゆるメッカです。どちらも正確なアラビア語転写を使っていますが、ここではメッカとメディーナを使います。

メッカでイスラームは始まります。メッカやメディーナの辺りは、オアシスつまり水のある場所に町が点在していますが、大半は砂漠です。広いけれども、人口は少なかった。当時のアラビア半島には国家はなかった。イランにはササン朝ペルシャがあり、現在のトルコの地域にはビザンツ帝国、東ローマ帝国がありました。しかしアラブの砂漠の辺りはどちらの帝国の影響もありませんでした。アラブ人たちは部族社会でした。遊牧民や商人が多く、農業は出来なかった。日本だったら卑弥呼の時代のような感じで、国という複雑な制度ではなくて、部族の長が支配をして治めていた。そこには多神教と先祖崇拜があった。日本でいうと、氏神です。農業地域では土地を守る神が大事なので、氏神や産土神を崇拜しますが、遊牧民も商人も町を離れて移動するので、町の土地を守ってもらう意味がなく、彼らの神は部族の守護神でした。氏神と先祖を崇拜することは典型的な古代宗教で、日本の神道に非常に似ています。

古代宗教は、日本でもそうですが、個人の信仰ではなくて部族共同体で信仰するものです。個人で信仰し、毎日

祈るものではなくて、決まった日時に祭をする、それを繰り返す。それが大事な宗教です。古代宗教には教義もない場合が多く、個人の救いも説かない。ただ儀礼を繰り返す。それでも宗教です。しかしこれは、イスラームから見ると、間違った宗教で、ジャーヒリヤと呼びます。日本語では「無道・無知の時代」と訳しますが、啓示（知識）がなく、シャリーアという道もなかった野蛮な時代・社会といった意味で、蔑称です。イスラームはジャーヒリヤに留まることを許さず、改宗を迫った。改宗しないと、戦つても改宗させようとなりました。

ごく簡単にイスラームの基本教義を言いますと、唯一神は「アッラー」、これは英語の「the god」に当たるアラビア語です。日本人の感覚だと、イスラームとユダヤ教とキリスト教、それぞれが自分の神は唯一神だと言うのだから、神が三柱でも、それぞれの信者が唯一だと思つていいのなら、それでいい。それがおそらく日本人の理解だと思えます。ところが、一神教はアッラーを認めたら、他の神々はすべて神とは認めない、認めてはならない宗教です。逆に言うと、他の神を神と認めるにはどうしたらいいか。後に生じた一神教は、先にあった一神教の神を抱き込むわけです。キリスト教では、ユダヤ教の聖書を『旧約聖書』、古い契約だが、同じ神との契約だとして、自分たちの伝統のなかに抱き込んだ。でも、ユダヤ教はキリスト教を認めません。3番目に出現したイスラームは、「ユダヤ教がヤハウェと呼ぶ神も、キリスト教が父なる神という神も、同じアッラーだ」と認めます。イスラームでは、モーセなど『旧約聖書』に出てくる預言者たちもイエスも、アッラーが遣わした預言者として認めます。『聖書』もアッラーが下した啓示として『聖典』扱います。つまり、先行する二つの一神教を二つとも抱き込んだのです。むろん、ユダヤ教もキリスト教もイスラームを認めようとしません。

実際には、聖典内容には違いがあり、「『旧約聖書』と『クルアーン』は違う」と、批判されました。イスラームでは、それはユダヤ教徒やキリスト教徒が啓示を隠したり、歪めた結果で、神の啓示はどの預言者に対しても同じ

啓示だったと主張します。この結果、イスラームは最初から、ユダヤ教徒とキリスト教徒は同じアッラーを信じる仲間、「啓典の民」だと認めて、イスラームへの改宗を強制しなかったのです。キリスト教徒やユダヤ教徒は、少し余計に税金を払えば、イスラームの共同体（ウンマ）の中でそれぞれの信仰の自由を守って生きることができた。つまり、近代以前のイスラーム世界は他宗教と共存できた、比較的寛容な社会でした。近代以後の争いや紛争の歴史の印象が強かったので、意外に思われるでしょうが、ヨーロッパより寛容でした。ただし、ジャーヒーヒーヤの多神教は、絶対に許さなかったのですが。

イスラームの教えは非常に単純で、イスラームの信仰とは、預言者が来て啓示を伝えたとき、それを信じて『クルアーン』に従って生きていけば、いずれ終末が来て、全員が裁きを受け、信仰者は天国へ、不信仰者は地獄に至るといふものです。この教えは基本的にはキリスト教とまったく同じです。いつか分からないが、未来に終末が来る。逆に言うとも現世が続いているかぎり、終末はまだ来ていません。来世もまだ始まっていません。現世の終わりが来世が始まる前に終末の裁きがあり、すでに死んでしまった人間が終末になると起き上がる、つまり甦って裁かれると『クルアーン』は説いています。神がそう教えるわけです。啓示を信じない者には、ばかばかしい作り話ではない。「終末なんてあるものか。裁きなどあるはずない」と言い、バカバカしいと笑っていた。実は、ジャーヒーヒーヤの人たちが一番信じられなかったことが、死んだ人間が甦ることでした。ある意味で、彼らの方が合理主義で、信仰者の方が非合理です。

『クルアーン』は、なかなかよくできています。信じなかった人間が、いよいよ終末が来たときに、それほど慌てふためくかが書かれています。いよいよ、天使がラッパを吹いて、星が落ちて、甦った死者たちが集まってくる。「これって、あの、あの終末か。それなら、大変だ。あの話が本当なら、不信仰の自分はひどい目に遭うではない

か。それなら、「信仰しよう」と、慌ててそう言いだす者もいます。クルアーンでは、終末が来る前までは、いつでも信仰の扉は開いているが、終末が来てしまつてから「信じます」という信仰は受け入れられない。それは駄目だと述べています。『クルアーン』は、信じていなかった人が終末に遇つたとき、慌てふためいて、信じておけばよかったと後悔する様子を示して、このようにならないためには、今信じるのが大事だと教えています。

『クルアーン』とは、世界や人間がどのように創造されて、世界の歴史はどうだったか、そしていづれ終末が来て裁きが行われる、その結果の永遠の来世とはどのようなものかを、神自身が解説している。そういう書物です。真理さえ分かれば信じるのが当たり前だ、というのがイスラームです。一言で言えば、『クルアーン』は信仰への誘いです。誘いですが、ただ信じるとは言いません。なぜ信じなければいけないのかを教えます。神がおまえた人間を創造し、おまえたが食べているものは、神の大地で育つたものだと。私は一人で作つていると言つたところで、種や土壌はどうだと問われたら、お手上げになり、神のものを食べていると認めざるを得なくなりまふ。そのことに気づいたら、神に帰依するのは当然だとイスラームは教えます。ですから、ムスリムになる、イスラームに改宗することは、イスラームからすれば、神に創られた人間が神に帰依するので、神との正しい関係に立ち戻ること、真人間になることであつて、何か特別なものになるのではない。しかも、信じた人間には天国が与えられることになつてゐるのに、「なぜ、まだ信じないか」とクルアーンで、何度も繰り返し返されます。

イスラームの特徴として、神が直接にアラビア語で語り、それを聞いた人々は自分で信じるか否かを決断しなければならぬのです。神と人間との間に言葉があるだけで、特別な人間はいないのです。仲立ちになつて救済を助けてくれる人はいないし、その必要もないのです。ですから、イスラームには救済権をもつ聖職者はいません。一番分かりやすいのはカトリックで、平信徒に対してミサを与える特別な人、神父が必要です。仏教の場合も、基本

的には在家に対して僧侶という出家者がいますが、イスラームには出家者もいません。全員在家で、出家は宗教的生き方にとって必要ないのです。

イスラームの救済論は、神を信じて『クルアーン』に従い、シャリーアに従って生活することです。支配者も学者も無学の庶民も、全員同じように1日5回のお祈りと断食などを行うことです。法学者は宗教の知識があり、それを職業とする者もいますが、特別な救済権限を持っていません。この意味で「聖職者がいない」のです。聖職者がいないから、国家から独立した教会・教団制度がありません。イスラームの世界にはバチカンに相当する制度がありません。そのため、ISが「俺がカリフだ、カリフ制を再興した」と宣言しても、「それは間違いだ」と異端を宣告できる権威をもつ制度も人もないのです。法学者にもそのような権限はありません。逆に、教会がないままで宗教が現代まで存続してきているのはなぜか、と不思議に思います。

イスラーム世界を統合しているのは教会ではなく、シャリーアによる統治です。基本的にイスラームの律法、シヤリーアに従って社会が統治されていれば、そこがイスラーム共同体（ウンマ）なのです。ウンマという言葉は『クルアーン』にも出てくる重要な言葉ですが、バチカンのような制度になったことは一度もないのです。歴史の教科書では、正統カリフ時代、ウマイヤ朝、アッバース朝と続き、イランにサファヴィー朝が興り、トルコにオスマン帝国が興る。これらはすべて国家です。

建物を見ると、教会とモスクは同じような宗教施設に見えますが、それぞれの宗教によって意味が違います。モスクは正確なアラビア語ではマスジドと発音し、これはひざまずいて祈る（跪拜）場所という意味です。礼拝の場だが、祭壇も神の像もなく、メッカの方向を示すくぼみ（ミフラーブ）があり、その方向に向かって全員が礼拝します。

次に『クルアーン』における世界観と人間観を説明します。基本的にはキリスト教と同じで、現世も来世も神が創造し、全てを神が支配している。創造から今まで、現世はずっと続いていますが、来世に比べればつかの間である。輪廻転生はなく、人生は一度かぎりです。イスラームも基本的には来世志向の宗教、来世こそが大事だという宗教です。しかしながら、イスラームは現世の社会問題にも積極的に関与します。来世志向型宗教の典型は初期仏教と初期キリスト教で、来世（仏教の場合は悟りの世界）こそが大事で現世には価値を認めなかった。来世志向の宗教が世俗を離れ出家的な生活を薦めることは当然だと思われるのですが、イスラームは現世の生活を重視する来世志向の宗教です。それは、現世も存続するかぎり神が創造して維持しており、人間は現世の秩序を正しく維持する義務を持つからです。神の代理者として、社会を正しく維持し、大地を汚すなと教えます。

それから、もう一つ大事なのが、「神は人間を精神と身体の統合として創造した」ことです。神は人間を精神として創造したのではなく、人間を男か女として創造し、男と女が求め合って結婚をして子どもが生まれる。そういう存在として神が創ったのだ。だから、イスラームでは結婚を卑しいとは考えていません。宗教的に生きるために出家する必要はない。家庭生活を営み、子どもを産み育て経済活動をして生活することは当然で、何も卑しいことではない。仏教もキリスト教も、どの宗教でも、大半の信者は社会生活者ですから、イスラームの立場はむしろ分りやすいはずです。イスラームは的外れなことを言っていない。出家に宗教的な意味はなく、社会生活をしていける人が信者であり続けるというのはどういふことかということをも真剣に求めた宗教です。

その内容として、次に《六信五行》の説明をします。六つの信仰対象ですが、第一に神で、第二は天使。天使は『旧約聖書』にも『クルアーン』にも出ており、いろいろな役割を持っています。啓示を届けに来る天使、終末のときラッパを吹く天使。すべての人の両肩に天使がいて、善行と悪行をたえず記録していて、その記録が終末の裁

きの中で閻魔帳として開かれます。墮天使、神に背いたシャイターン、悪魔もいます。天使は神ではないが、崇拝の対象です。

第三が預言者です。イスラームではアブラハムもモーセもイエスも預言者として認めています。イエスを神の子だと言うところはキリスト教の間違いだが、イエスも預言者としては崇拝します。第四が啓典です。啓示の本という意味で、啓典という言葉を使います。『聖書』も啓典ですが、実際には、『旧約聖書』の叙述はクルアーンにも多く見られますが、新約聖書では『福音書』のみを含みます。第五が来世で、これは終末の到来と終末の裁き（最後の審判）も含みます。イスラームの来世は現世が終わってから始まる永遠の世界です。最後は予定です。これは、現世で起こることはすべて神の予定であると信じていることです。日々の出来事も病も死も神の予定によるのです。イスラーム世界を旅すると、例えば「この町にもう一度来たい」と言う時、タクシーの運転手が「また、いらつしゃい、インシャーラー」と答えます。明日のことでも不確定な未来のことでも、未来の約束や希望を話すとき、ほぼ必ずムスリムは「インシャーラー」を付け加えます。「インシャーラー」は、直訳すると「もし神がお望みならば」を意味し、未来の約束のときには全部それを付けます。

日本人は宗教というと死や病の不安を連想しますが、『クルアーン』は不思議なほど死や病の不安に触れていません。病と死は思いがけないときに来るが、すべて神の予定だと書かれています。小さい子どもが死ぬことの不条理さ、逆に現代では、よぼよぼになって情けないと思うが、まだ死ぬない。これもすべて神の予定として受け止めなさいと書いてあります。実際に、イスラームでは死が近づくとか、病になったことは宗教に近づく理由にはなりません。そういう宗教です。仏教は生老病死を四苦と捉え、病や死に苦しむ人間を非常に深く考察していると思えます。ただそちらに偏りすぎて、健康な社会生活をする人間を軽視している。イスラームは逆に健康な社会人の宗

教です。健康な社会人が信仰者として生きていくにはどうすればいいかを深く考察していると思います。仏教はそれが抜けているし、イスラームには病や死の不安を軽視しすぎているように思えます。人間には健康な社会人であることと、病や死に苦悩することの双方があるわけですから、仏教とイスラームは互いに学べばいいのではと思います。

神の予定は六信の一つで重要ですが、予定を強調しすぎると、どうせ決まっているのなら、努力も無駄だと、投げやりになりそうです。実際にイスラーム世界で働く日本人が「納期を守らない、契約違反だ」と怒るのですが、相手のムスリムは「納期を約束したとき、インシャーラーと言ったでしょう」と平然として謝らない。インシャーラーを口実に約束を破るさもありませぬ。ではムスリムはずるくて無責任かというところ、そうではありません。ムスリムたちは終末の裁きの厳しさも深く信じているからです。終末の裁きは個人責任を問いつめるもので、これだけだと息苦しく、時に絶望しかねない。神の予定を信じることに、インシャーラーで絶妙なバランスを取っているわけです。

次に、五行、五つの義務行為の説明をします。まず、信仰告白。「ラー・イツラーハ・イツラッラー、ワウムハンマド・ラスール・アッラー（アッラー以外に神はない、そしてムハンマドは神の使徒）」の二行をアラビア語で唱えることが信仰告白で、ムスリムはしょっちゅうこの言葉を口にします。またモスクでこの文言をアラビア語で唱えれば、ムスリムになれます。第二に一日五度の礼拝（サラ、サラート）。日々の礼拝は必ずモスクへ行くわけではなくて、朝はほとんど家でいい、昼は職場で行うこともあります。金曜日の昼の礼拝がムスリムにとって一番大事で、できるだけモスクに行きます。礼拝時間にバザールが閉まることはないのは、皆が交代で礼拝をしているからです。このように緩やかな対応をしています。

第三に、ラマダーン月1カ月間の断食（サウム）。現代では、すべてのイスラーム諸国で普段は西暦を使っていますが、断食や巡礼の儀礼行為はイスラーム暦（ヒジュラ暦）に従って行います。全世界に散在するムスリムたちはほぼ同時に断食を始めます。イスラーム暦は新月から新月の太陰暦なので、断食の時期は毎年十日ほど早まり、季節も変化します。今年の断食はつい先ごろ終わりました。夏の断食は早朝から夕刻までが長く、暑さも厳しいために相当苦しいが、冬なら時間も短かくて少しは楽です。断食は健康な成人の義務で、子どもはしなくていいし、病人や妊娠中や授乳中の母親も免除で、いろいろな免除規定があります。そういう非常に現実的な緩やかな対応もあります。

第四が巡礼（ハッジ）で、生涯に一度の義務として巡礼月にメッカ巡礼をする。巡礼月以外のメッカ巡礼は小巡礼と呼ばれて、ハッジにはなりません。巡礼には主に世帯主だけが家族を残して行くことが多かったし、巡礼の往復に何カ月もかかることもあったため、留守中の家族が飢えないだけの蓄えがあることが巡礼に参加する条件になっています。メッカ巡礼では、金持ちも貧しい者も、黒人も白人も全員が同じ真っ白の巡礼服を着ます。イスラーム世界の現実には、サウジアラビアの大金持ちとアフリカの貧しい人たちとの貧富の差は大きいのですが、メッカ巡礼の期間は儀礼の場というユートピアで、神の前の平等が実現します。メッカ巡礼はスンナ派もシーア派も一緒に同じ時期に行います。これもユートピアの一例かもしれません。今日の話では、スンナ派とシーア派の分裂や歴史について詳しく話ませんが、現在のイラクでもシーア派とスンナ派の対立や衝突が報道され、それがあつたのが事実ですが、メッカ巡礼を一緒に行う面はあまり知られていません。

もう一つのイスラームの特徴として、『クルアーン』はむろん共通で、しかも同じアラビア語で唱えるので、メッカ巡礼ではアラブ人、アメリカ人、日本人、インドネシア人でも、全員が同じ言葉と同じ所作で巡礼や礼拝をで

きるのです。旅行中にどこの国のモスクに立ち寄っても、同じアラビア語と所作で礼拝ができます。この点で、イスラームが世界宗教であることが納得できます。アラビア語でクルアーンを誦すること、現代では頑固な宗教だという印象を与えますが、言語の共通性のメリットに気づくと、これも一つだと思えます。イスラームの世界では神学や法学は共通で、学者になるにはアラビア語の習得が必須です。

五行の最後がザカートという定めの喜捨です。ナツメヤシの畑などの所有や所得によって納付額が決まっているので、定めの喜捨と言います。喜捨の使い道は、モスクの建設と維持、布教に必要な費用など宗教関連の目的に使われますが、それだけではなく、道路や水道、学校、病院、バザールなど公共性の高い施設の建設にも使われ、孤児や母子家庭、病人などの弱者救済にも使われてきました。喜捨は一種の税で、富める者は多く納め、貧しい者はむしろその恩恵に浴するので、富の再分配が行われてきたのです。初期のイスラーム世界の社会資本の多くが喜捨で整えられたと言われています。イスラームはこのように社会や経済、政治にも積極的に関与してきた宗教です。最後に、六信五行には含まれませんが、最近時おり見聞きするハラールについて。ハラールは「許されたこと、もの」という意味で、食べ物に限定されません。日本では、豚やアルコール類が入っていない食べ物なら、ムスリムが食べてよい「ハラール食」として用いられます。このようにさまざまな生活様式がシャリーアで定められています。

今日お話ししようと思っている大事なことは、《律法（シャリーア）はなぜ必要か》という問題です。日本人の感覚では、とりわけ真宗の「いずれの行もおよび難き」という教えを知っていると、戒律に対する反発や抵抗が非常に強いのはやむを得ないと思えます。シャリーアで礼拝の際の手足の清め方、礼拝や断食をできなかったとき、どのように埋め合わせをするかなど、儀礼の詳細な規則を定めています。

ところが、シャリーアは儀礼の規則だけではないのです。『クルアーン』の4章や5章の冒頭部に、結婚や離婚、相続の法的規範が書かれています。クルアーンは単なる法律書ではないので、「誰とは結婚してはいけない」、「離婚してもいいが、結納は取り返さないことが望ましい」など、日本人の宗教観では聖典の内容だとは思えないほど、微細な話に及んでいて、ぎよつとします。『クルアーン』は神が語ったとされますが、神がよくこれだけ人間のところを見ていると感心します。宗教はもう少し高邁なものだと思つと、クルアーンの叙述にはびっくりします。私も日本人ですので、最初は驚きました。10年ぐらい勉強した後、ある日、電車に乗っていて週刊誌のつり広告を見ていてふつと気づいたので。人間がスキャンダルを起こすのはほぼ金銭とセックスに絡んだトラブルだと。洋の東西を問わず、今日まで同じではないかと。このことに気づいたら、『クルアーン』が取り上げている問題がまさにその性の問題と金銭絡みの相続税であることには、深い洞察を見て取ることができます。現代でも相続をめぐる家族間で争いが生じています。少しの金額では争わない人も、この家が手に入るかどうか、何千万円が自分のものになるかどうかという相続の場面では争いがちなのです。「えつ、あの家で兄弟が争うの」といった話を聞かれた方も多いと思います。それが人間なのだと思つくと、クルアーンが非常に鋭く人間を捉えていると感心します。イスラームは善悪に対して楽観的なのではなくて、人間がどこで道を間違うかを分かつて、そこに「こうしてはならない」や「これを守れ」というくさびを打っている。預言者の死後に、シャリーアでさらに細かく決められ、その一部に法律があるのは事実です。宗教がなぜ婚姻や相続問題に関与するのか。その理由は、先ほどお話しした、神が人間を精神と身体の統合として創ったことにあります。信仰はイスラームにおいてもやはり精神ですが、信仰だけふわつと浮いていることはあり得なくて、一人の男か女か、若いか年寄りか、信仰者は身体的な人間で、どこかで生活しています。そのような人間の信仰が問題なのですから、信仰と社会生活を分けて考える方が無理だとい

うのがイスラームです。一人の人間として礼拝もするし、結婚をして子供を育て、商売もする。一人の人間の生き方をイスラームの原則で生きなさいと言うわけです。その結果、礼拝や断食の儀礼行為のルールも、結婚や相続のルールもシャリーアで定めることとなります。ある意味では徹底して、筋が通っています。日本人は、宗教は心の問題だと決めつけがちで、そうすると、イスラーム理解の入口で躓いてしまい、理解しがたい宗教のように見えます。今述べた人間観から考えると、イスラームのあり方は筋が通っていて、合理性をもちます。

現在の日本社会でキリスト教徒として暮らす場合を考えてみます。キリスト教徒は家の先祖を崇拝しない、むしろ崇拝してはいけないのですが、結婚した相手の家がお寺と関係がある場合、個人の信仰を理由に墓参や年忌法要に参加しないことは、ほぼありえないでしょう。信仰は精神の問題ですが、日本でもそうとばかり言えないのです。真宗では教義上は阿弥陀仏の信仰で徹底していて、神祇不拝とも言われますが、農民が地域の神社の神を祀らずに村人と一緒に農作業をすることはかなり難しいのではないのでしょうか。結局、現在の日本のように仏教徒でありながら、生活面では神道も崇拝するあり方になってしまいます。

イスラームは結婚や商売のルールを定めたことで、信仰者の共同体（ウンマ）をジャーヒリーヤから断絶させたのです。イスラームが精神だけの信仰共同体だったら、ムスリムになった人も結婚するときは、元のジャーヒリーヤの部族の結婚の規則に従った。そうすれば、元の部族の先祖崇拝が残ったのではないかと思えます。イスラームはそうではなく、ムスリムはジャーヒリーヤの婚姻規則ではなく、ムスリム同士の婚姻規則で結婚した。そこまで徹底して初めて、イスラーム共同体はジャーヒリーヤから断絶できたのです。

終末の裁きでは、人は神と1対1で直面するし、徹底して個人として裁かれますが、その人は現世では社会で家庭生活をし、商売をしている。ですから、イスラームでは信仰と社会生活を分けられないと教えます。そこに、イ

スラームが信仰者の社会生活に関与し、法律まで整えた理由があります。

戒律の厳しいもう一つの理由もあります。イスラームは全員在家です。在家者は社会生活をして商売上の金勘定もするし、子どもを育て、母親は食事を作っている。だから、四六時中神のことを想うことは無理だと考えています。日本人は「1日5回も礼拝を強制される」と抵抗を示しますが、イスラームは「1日5回だけ、少し商売や子供の世話を止めてアッラーを思い出しなさい。終わったら、また金勘定すればいい」と説きます。礼拝は在家信者の暮らしの中にうまく組み込まれています。さらに、礼拝は身体的行為なので習慣化されます。習慣化されると、礼拝をしないと落ち着かなくなるのです。それは行為が信仰を養うと言ってもいいと思います。子どもの頃から礼拝などを身に付けていくというのは大きいと私は思います。この点が、イスラームが今日まで強く残っている理由かと思えます。

日本人は「信仰があれば、細かい規則は必要ない」と考えますが、イスラームは信仰者の生き方をマニュアル化して、「それに従えば、終末の裁きをクリアできて天国に行ける」と教えます。マニュアル化されている方が易しいといえれば易しいです。商売などで生活に追われていると、自分一人で自分を律して礼拝することは難しいが、規則で定められ、しかも周囲の皆と一緒に礼拝することが決まっていれば、それに従う方が楽ではないかと思えます。ルールがない場合、自分の信仰を基準にその都度自分を律することが必要ですから。

次に、『イスラームの宗教性』としてまとめました。死の問題を言わないこと、それから一神教を徹底したこと。預言者は六信の一つで、尊敬され崇拝されますが、ムハンマドは礼拝の対象にはならなかった。ムハンマドの彫像も画像もありません。実は、マウリドといって、ムハンマドの誕生日を民衆は祝いますが、公的な儀礼には含まれません。それも見事です。そういうものです。ただし、イスラームは言葉を重視する宗教で、ムハンマドの言葉は

神の啓示とは別に収集されて『ハディース』という書物となり、特に法解釈において『クルアーン』に次ぐ大事な法源となっています。人格は神格化しなかったが、言葉をやや神格化したようにも思えます。

次の特徴は、宗教はこころの内面にとどまらない。つまり、イスラームは社会、政治、法律にも積極的に関与する。これもイスラームの宗教性の特徴です。これは、現代のように政教分離の考えに基づくとは抵抗があるかもしれませんが、先ほど説明したイスラームの人間観から考えていくと、イスラームは理屈が通っている非常に合理的な宗教であると私は思っております。

『クルアーン』はシーア派もスンナ派も同じで、しかも礼拝ではアラビア語で『クルアーン』を唱えると決まっています。イスラーム世界ではクルアーン学校で、ある程度の『クルアーン』の読誦と内容を学びます。トルコやインドネシアの子どもも礼拝ではアラビア語のクルアーンが必要なので、『論語』の素読みたいに、最低限の文言を学びます。さらにクルアーンの内容の概要も学ぶので、子どもも六信五行を必ず知っています。それに対して、仏教ではお経が多すぎて、どの宗派がどのお経を読んでいるのか、よく分かりません。仏教の經典の複雑さはともかくとして、また、現在の日本で宗教を教えること、宗教教育が非常にやりにくいことも事実ですが、仏教はもう少し子供への教育を工夫してもいいのではないかと思います。

(2) 現代とイスラームについて説明します。現在のイスラーム世界は、中東ではパレスティナ紛争に加えて、かつての大国シリアも内乱をかかえ、ISが台頭して、難民が激増し、欧米でも過激派によるテロがしばしばおこるなど、問題が山積みです。現在のイスラーム世界を考えるには近代以後の歴史を概観する必要がありますので、ごく簡単にお話しします。

大航海時代までは、イスラーム世界が経済的にも文化的にもヨーロッパ世界より優位だったが、それ以後、ヨーロッパ列強がアジアやアフリカを植民地支配し始め、産業革命もあり経済発展していったのに対し、中東は勢いを失いつつありました。中東ではオスマン帝国がトルコを中心に、中東のかんりの地域と東欧、バルカン半島の一部を領土としていましたが、19世紀以後、ブルガリア、ギリシャなど周辺の地域が独立して、衰退にむかっています。中東はインドに比べると遅い方で、19世紀になってから、イギリスとフランスが中東に進出し、ロシアは黒海からトルコのボスポラス海峡を通れば地中海に出られるので、ロシアもトルコとクリミア戦争などを繰り返して、中東に進出しようとしていました。トルコは非常に親日的です。トルコがロシアと戦争をして負け続けていた時期に、アジアの端っこでジャパンという小国がロシアに勝ったと聞いて、驚くと同時に日本を尊敬し、日本からいろいろ学ぼうとしたことに由来しています。

オスマン帝国は現在のサウジアラビアやエジプトも支配していましたが、その支配は近代国家の支配とは異なります。オスマン帝国の سلطان に徴税の一部を納め、一定の恭順を示せば、各地域はその土地の盟主、実力者に実質的な統治が認められていた。イスラーム世界では商人や遊牧民が多く、彼らは国境を超えて行き来していた。シヤリーアという共通の規範があるため、国境を越えても何の問題もなかった。現在、イラクとシリアは内乱状態で、支配の空白地域に IS が支配を広げたのですが、この場合もイラクとシリアは私たちが想定している近代国家としては成熟していなかったと考える方が適切だと感じ始めています。江戸時代の徳川幕府も、徳川は各藩の藩主を支配していたけれど、藩の民衆は徳川ではなく、藩主を統治者と認めていた。近代国家ができる以前のヨーロッパでも、いくつかの帝国の内部で、ユダヤ人たちやハンザ同盟などが一定の自治権を行使できたように思います。イスラーム世界も同様で、帝国の支配は緩やかで、領主や王、部族の長老など一定の地域を支配していた。イスラーム

世界の場合、近代国家になる過程で、民衆たちが「ここが自分たちの新しい国家だ」と自覚して立ち上げたのではなく、植民地支配の線引きのままイラクとシリアが国家となったため、近代国家としては非常に脆弱だったのではないかと思っています。

特に、イスラームの場合は国家がなくても、部族がいて、シャリーアがあれば、社会生活は何の問題もなくてできたわけです。それが、20世紀になってから、イラク、シリア、クエートなどは、イギリスとフランスがテーブルをたたき合って引いた国境線で国をつくって、結局それぞれが独立して、どれもが一人前の近代国家になっていった。私たちは国の名前で、アフリカの諸国もシリアやイラクも、どれも国家だと認めてしまいます。しかし、そこに間違いがある。私も最近まで近代国家が政治形態の到達点だと思っていました。近代国家はまだ成熟した制度になっていないことに気づきました。日本やヨーロッパの国家は、近代化以前から、ある程度の国家体制を保っていた経験がありますが、特にアフリカの諸国は国家形態を一度も経験しなかった部族たちが、植民地統治で引っかき回された挙げ句に、現代の地図にあるように、南アフリカ共和国などとして独立国になったのです。

ここから、イスラーム世界の近代化について説明します。近代化は基本的に、ヨーロッパ以外の国々はヨーロッパ近代の圧倒的な武力と財力を目の当たりにして、何とかそのような国にしたいと願い、追いつこうとしたことに始まった。日本の近代化もそうでした。日本やトルコ、タイなど数少ない国は植民地支配を免れましたが、アジア、アフリカの大部分はヨーロッパ列強に植民地支配されて、その過程で支配者の都合で近代化、西洋化が進みました。近代国家・近代社会のモデルはヨーロッパでした。イスラーム諸国も近代化を目指しましたが、日本と比べると遅れました。日本はあらゆる面で西洋化を目指して、猛スピードで進みましたが、イスラーム諸国の場合、シャリーアをどうするか、どう改革するかという大問題に直面しました。その点が日本との違いです。

最初に大きな枠組みを話しておきます。近代化のごく最初には、西洋化とシャリーア改革の二つの目的を掲げた人もいたのですが、実際には困難で、結局、日本と同じような西洋型近代化を求める世俗主義路線と、クルアーンを学び直し、シャリーアを改革して、西洋型ではないイスラーム的近代化を目指そうとする復興主義路線に分かれました。最初に、西洋型近代化を選んだトルコの例をお話しします。

トルコは、オスマン帝国が第一次世界大戦まで六〇〇年続いており、オスマン帝国時代にすでにいくつかの近代化改革を試みていました。独立はかろうじて保ったものの、イギリスとロシアに干渉を受け、国土を分割されかけたのですが、その危機を救ったのがムスタファ・ケマル、ケマル・アタチュルクという軍人の英雄で、彼がトルコ共和国を創設し、フランスの法律や制度のモデルにかなり大胆な西洋化改革を実行しました。アタチュルクにとって、オスマン時代のものはすべてイスラーム的で、前近代的とみなして、断絶しようとしてきました。オスマン時代のトルコ語はアラビア文字で表記していたのですが、それをローマ字表記に変更し、何よりもシャリーアの停止を定めました。これは、トルコ共和国の法律はフランス法を導入した世俗法で統治し、シャリーアを用いないことを意味しました。ただし、国民の大半はムスリムですから、彼らが儀礼をシャリーアに従って行うことは認めました。さらに、フランスのライシテ（政教分離）をまねて、ライクリックというトルコ語を造語して、トルコ共和国は政教分離を原則とすると定めました。イスラームという政治と非常に密着した宗教で、政教分離を言い出したので、他のイスラーム諸国から「それでもイスラームか」という批判も出されました。

フランスでは公共空間でムスリムがスカーフを着用することを禁じていることが知られていますが、トルコでも国立大学では女子学生はスカーフを脱ぐことになっていました。ところが、トルコでは二〇〇〇年ごろから親イスラーム政党が民主的な選挙の結果、多数派を占めるようになって、今日に至っています。私が滞在した二〇〇三年

には、一部の国立大学では女子学生が教室でスカーフを着用していたのを見かけました。トルコ人教員によると、「女子学生の権利を守っているのだ」とのことでした。

政教分離といっても、初期から教会制度のなかったイスラームですから、国家と教会を分離することは不可能です。トルコの政教分離とは、国家の統治をシャリーアで行わず、国家が制定した近代法で行うことです。イスラームの世界ではどこでも同じですが、教会がない。たとえば、宗教間対話に参加する人を派遣して欲しいとき、どこに連絡をすればいいのかわからないのです。しかし、イスラーム世界では、国家の省庁の一部に宗教省、宗務省や宗教教育省、ワクフ省といった部署があります。そこで宗教の様々なことから管理し、決定しています。政教分離を原則とする現在のトルコでも同じで、イスラーム原理主義的な国家であるイランでも同じなのです。日本人の感覚では、政教分離と言いながら、国家の省庁で宗教を管理することは想像もできないことです。ついでに付け加えれば、トルコでは、モスクは国有財産で、モスクを管理するイマームという宗教の専門職は国家公務員です。トルコ人は「政府が宗教をコントロールするには、公務員にして給与を与える方法が一番いいのだ」と平気です。

現代のトルコはまったくのイスラーム社会です。共和国の初期には、政府はイスラーム神学校を閉鎖し、宗教教育も行わず、イスラームを抑圧しました。面白い話があります。一九五〇年代にアメリカへ留学したトルコ人は、アメリカにキリスト教教会があり、みんなキリスト教を信仰していることにびっくりしました。近代化の進んだアメリカにキリスト教があることに気づいたトルコ人は、トルコに帰国して、イスラームを学び、イスラームを教化する活動をしたとのこと。共和国政府も徐々にイスラームの抑圧を緩め、イスラーム教育も復活させていきました。そして、一九八〇年代にトルコは経済発展が進み、テレビが普及した。日本でいうと一九六〇年から七〇年代です。日本と欧米では、テレビが普及すると、娯楽番組が増え、テレビだけが原因ではないにせよ、教会に通う人数

が減少していった。ところが、トルコだけではなくどのイスラーム諸国でも、テレビが始まったら宗教番組が多くなった。イスラームは寄付の盛んな社会で、今でもかなりの寄付が集まっている。一部は財団法人のような組織をつくり、イスラーム教育や出版などさまざまな文化事業などを支援しています。そのような財団が競って番組のスポンサーになるのです。またイスタンブルなど都会には、カルチャーセンターも作られ、そこでもイスラームやトルコの歴史や文化を教えている。つまり、テレビの普及は、伝統的な神学校とは異なる宗教教育の媒体となり、実際にモスクに通い、断食に参加する人が増えてきたのです。これは、日本や欧米では見られなかった面白い現象です。

八〇年代のイスラーム復興はただ昔に戻ったものではありません。昔は、農村の女性がスカーフを被ってイスラーム的服装だったが、大学出のキャリアアウーマンは欧米風の服装で、スカーフも被らずさっそうと都会で働いていた。そういう二極対立だったのが、一九八〇年代以後には、大学出のキャリアアウーマンも「私はムスリマ（ムスリムの女性形）」であることを誇り、スカーフを好んで着用し始めているのです。欧米でも、一九七〇年代の初期のフェミニズムはイスラーム女性のスカーフを抑圧や女性差別の象徴として攻撃したが、現在では、彼女たちのアイデンティティと誇りの象徴だと気づいている。このような傾向が一九八〇年代からのイスラーム復興では見られます。

次に、復興主義について説明します。これは一般にイスラーム原理主義と言われるものですが、ただしテロ行為をするのは、その中でもごく一部です。イスラーム世界で近代化をするには、西洋を受容するだけではなく、シャリーア改革も必要だという主張があったことにすでに触れました。シャリーア改革にはクルアーンが基本になります。復興主義がクルアーンを重視する理由は、『クルアーン』がイスラームの根本聖典であることはむろんですが、

加えてクルアーンはキリスト教徒たちが持つている『聖書』より後に啓示されたもので、いわばバージョンアップされた最新版の啓示だという自負です。同じ一神教同士であるがゆえのプライドのようにも思います。

復興主義が西洋の受容を拒むもう一つの理由は、自分の文化への誇り高さです。確かに近代以前、大航海時代以前にはイスラームがヨーロッパより経済的にも文化的にも水準が高かったのです。イスラームは古代ギリシャの諸学を翻訳して受容し、発展させました。哲学、数学、医学、化学、建築など、どの分野でも先進国で、スペインにいたイスラーム学者が勉強していたギリシャ哲学に気づいて、キリスト教徒がギリシャ哲学などを学び始めてルネサンスが始まったのです。また、イスラームの医学教科書をラテン語に訳して17世紀まで使っていたのです。そのため、「アルコール」のように「アル」が付く英単語が相当ありますが、それらはすべてアラビア語に由来します。過去の文化の高さの自負、過去の優越感があるゆえに、近代になって落ちぶれたことが悔しく、素直に西洋に学び受容しようとしなかった。

彼らの反欧米にはもう一つの理由があります。映画『アラビアのロレンス』をご覧になれば分かりますが、20世紀初頭にエジプトに滞在していたイギリス人の多くがアラブ人を見下し、横柄な態度で接していた。近代的な価値観が必要だ、基本的人権やヒューマニズムを学べと主張するイギリス人が、アラブ人に対しては決してヒューマニストとして対応しなかったのです。復興主義者たちは、あれがヒューマニズムか、あのようなイギリスから何を学ぶ必要があるかと反発したし、その怒りは当然だったとも思います。その意味では、復興主義を育てたのは当時のイギリス人の横暴さだったかもしれません。これらの理由で、復興主義者たちは反欧米的になっていきました。しかし、実際に近代的イスラームをつくり出せていないのが、今のイスラームの原理主義者たちです。

復興主義が原理主義と呼ばれる理由は、彼らがクルアーンというイスラーム原理（ファンダメンタル）に忠実だ

からです。彼らはクルアーンを字義通りに解釈するために、時として女性に教育は不要など時代錯誤な主張をします。彼らがクルアーンを重視するのは、クルアーンの絶対的価値はむろんですが、イスラームの成立当時の勢い、創造的な時代を理想とするためでもあります。確かに最初の啓示から百年も経たないうちに、アフリカ北岸からイペリア半島まで、またシルクロード沿いに中央アジアまでイスラームは広がりました。ISは初期イスラームの勢いの再現を願っているのです。カリフ制の復活を宣言したのはその証拠です。

しかし、歴史的に見れば、初期のイスラームは非常に柔軟に現実と妥協し、融通をつけたから広まったのです。それは『クルアーン』の字句に従うどころか、ジャーヒーヒーヤの社会慣習の多くを受容していったのです。なぜそれが可能だったのかを考えると、ムハンマドと初期の教友たちは、クルアーンの精神をブレずに持っていたからこそ、いろいろなものを受容する自在さを発揮できたので、字句に従う原理主義のやり方とは正反対です。原理主義者たちも近代化して経済発展もしたいのなら、現代にイスラーム的近代を実現するために初期イスラームの活力を再現したいなら、クルアーンの字句ではなく、その精神をよく理解して、その精神に忠実に理性を働かせて大胆な解釈をすることも可能なはずですが、原理主義はその方法を採用しません。

中東のイスラーム諸国では、トルコのような極端な西洋型近代化、世俗主義はとらずに、シャリーアを重視していますが、政権側は欧米主導の国際情勢に合わせ、時に経済援助を受ける必要などから、現実にはトルコのように西洋法を導入し、西洋型近代化を受け入れています。しかし、石油で潤った産油国は一部の国に限られており、エジプトなどはまだ貧しい国に留まり、民衆には政権への不満もあります。復興主義の活動は民衆に食糧援助や医療奉仕をすることで、貧しい民衆から一定の支持を受けてきたのです。

次に《テロとイスラーム》についてお話しします。テロリストを育てる、一本釣りするのに必要な物語はイスラームが提供しています。イスラーム初期には、布教のための戦いでなくなった殉教者が実際にいたため、クルアーンに殉教者への言及があります。殉教者だけは特別で、終末の裁きを持たずに神に会えるのだから、死を怖がらなくていいと書いてあります。それを、若者たちをテロリストにリクルートするときに使うのです。この物語が有効であるための条件があります。第一には、終末の裁きと来世がリアルに信じられていることです。第二に、差別されたり抑圧されたりして現在の人生に不満があることです。それがなければ、現在の人生を捨てて殉教を選ぶ人はごく少ないはずです。つまり、ヨーロッパ諸国で暮らすムスリム移民の子どもは就職差別を受け、貧困から抜け出せない。中東からヨーロッパに留学できる子弟はある程度裕福な家庭の子で、中東ではそれほど宗教に熱心ではなかったが、ヨーロッパ社会で差別を受けると、自分のアイデンティティをイスラームに求める者も出てくる。そういう若者にISなどが、「今の人生は面白くないだろう。この社会は不正義で、それを見過ごして生きるより、この不正義と戦うことを神は望んでいる。君は今ここで戦って自爆して死んだら、神の道に倒れた殉教者になれる。つまらない人生で生き続けるより、自爆テロで殉教者になるほうが素敵だよ」とささやくのです。この殉教を理想とする物語をイスラームが用意しているのは事実ですが、テロを根絶するには力と法的拘束による取り締まりでは限界があり、他方では移民の子供やムスリムたちが不満や抑圧を感じない社会を作ることが目指す必要があります。余談ですが、殉教ではほぼ男性が死にます。戦争になったら、男が死んで、女性と子どもが残される。クルアーンに、4人まで妻を持てる」と書かれています。これは母子家庭対策です。金にゆとりがある男は4組までの母子家庭を養うことを認めるのです。一人が正妻で、あとはめかけではなく、4人とも正妻です。同じ条件で、同じ経済状態で、同じ満足を与えなければいけないと定められています。それができないならやめておけと書いてありま

す。まともな男性は一人の妻を満足させるのは大変ですから、複数なんてとんでもないと、ほとんどの男性は言います。イスラーム世界も、ほぼ一夫一婦制の社会です。

それから、もう一つ言っておけば、テロは目に見える暴力です。でも、その背後で中東やアフリカでいろいろな差別を受け、貧困や紛争のために、ムスリムたちが殺されています。ムスリムたちが何千人も殺されたことが、どれだけ報道されてきたらうか。9・11で6千人余りが亡くなったが、米軍によるアフガニスタンへの空爆でムスリムの市民、子供が何人も殺されても、ほとんど報道されず、世界の人がその死を追悼しなかったではないか、とムスリムは不満に思っています。9・11のテロの映像を見て、パレスティナ難民が喜んでいたことが報道され、輿論を買いました。しかし、アフリカのイスラーム社会を研究している友人は、9・11のテロに拍手した人は結構多いと思うと言いました。それがいいことだとは思いませんが、ムスリムたちの鬱屈や欧米人だけが人間のよう扱われることへの不満、そういったムスリムの不満をなくす努力をせずに、トランプ大統領のように、ISを爆撃すればいいというだけではテロもなくならないし、中東平和もこないと思います。

最後に一つ付け加えておくと、《欧米のイスラーム嫌い》は、歴史的にも何世紀も前からあるもので、根が深いです。これは欧米のキリスト教徒の心にずっと澱のようになり、テロなど何かが起こった途端、澱が沸き立つように強くなるのです。日本には幸い、そのようなイスラーム嫌いはないのですが、日本には異質な他者を排除する傾向が澱のようにあるので、楽観もできません。

他者との共生という点では、近代以前のイスラーム社会は優れていました。一例を挙げると、カトリックがイベリア半島を再征服したレコンキスタで、ムスリムとユダヤ教徒も追い出された。彼らは今で言う難民になって中東に戻ってきた。ムスリムだけではなく、ユダヤ教徒も受け入れたのはオスマン帝国でした。イスタンブルの一角に、

ユダヤ人にも土地と家を与えたのです。その子孫が今もイスタンブールに住んでいます。私はそのユダヤ人に会い、彼らが発行している新聞を見せてもらいました。ほとんどトルコ語ですが、1ページだけはヘブライ語で聖書解説を載せ、もう1ページはスペイン語でした。自分たちの祖先がスペインから逃げてきたことの証しです。私は、歴史のつながりをこの目で確認したような感動を覚えました。

最近のニュースではテロや紛争ばかりで話題になるイスラーム世界ですが、このような他者との共生の文化を持っています。欧米のイスラーム嫌いに流されないように、そして今からでも少しでもイスラームという宗教を学んでいただければと願っています。

説明があちこちに飛び、まとまりの悪い話になりました。分かりにくかったかもしれませんが、今日はここで終わります。

最後に数分だけ、画像でラマダーン月のカレンダーを紹介します。これは私が二〇〇三年にトルコに滞在した時にもらったものです。断食はラマダーン月1日から28日まで、日の出から日没まで行うので、その時刻と礼拝の時刻を記したカレンダーです。日の出と日没は各地で異なり、アンカラとイスタンブールでは15分ぐらい違います。一日ごと数分ずつ変化し、その数分の変化がカレンダーにも示されています。同じトルコ国内でも各地、町や村ごとに数字が違います。トルコでは普段は西暦と全国共通の時計を使っていますが、断食ではこのようなカレンダーの時刻に従います。このカレンダーは断食が始まる前に、食料品店やスーパーで配布されます。日本の正月前の暮れに似ています。みんなは、これを見て食事の時間を知り、食事の準備を始めます。

質問がありましたら、説明を補足します。

(終了)